

中国語初中級における比較表現の 文法事項分割・分散化試案

西 香 織
(外国語学部)

鈴 木 慶 夏
(釧路公立大学経済学部)

キーワード

中国語教材、比較表現、文法事項の分割・分散化、文法事項の軽量化、コミュニケーション文法

要 旨

主に日本の大学で使用されている中国語教材において、文法事項をどういう表現形式として学習項目と認定するか、また、そのような学習項目に対しどのように説明するかは、ほとんどが中国語学における文法論研究の視点をそのまま持ち込んだ「中国語学的文法」に基づいているにすぎず、中国語学習者が中国語でコミュニケーションするのに必要な情報が提供されていないばかりか、かえって学習者に無用な負担を強めていることさえある。本稿は、コミュニケーションの場での使用をめざす教育文法には、必要に応じて表現形式を適宜選択できるよう、これまで一つの学習項目として扱ってきた文法事項を分割、分散して提示することが有益であると主張するものである。比較に関わる表現については、陈珺・周小兵（2005）、陈珺（2010）がすでに主に中国で使用される CSL 向けの教材を対象に、詳細な取捨選択、分割統合、分散化の試案を提示している。本稿ではこれらの案をもとに、主に前置詞（介詞）“比”を用いる比較表現について、日本語母語話者が日本の大学で中国語（CFL）を学ぶことを想定して、特に初中級段階の文法事項の分割・分散化試案を提示する。

1. はじめに

日本語教育においては、野田尚史研究グループが旗振り役となり、日本語学習者が日本語でコミュニケーションするときに必要な、日本語学に依存しない「日本語教育文法」（野田編 2005）の構築を目指す動きが高まった。「日本語教育文法」ではコミュニケーションの目的が先にあり、文法は、その目的を達成するために必要な機能を基盤としたものという位置づけで

ある。野田（2005）はコミュニケーションのための「日本語教育」では、「思い切って不必要な文法形式は捨てる、たとえば「教えても習得されない可能性が高い文法項目は切り捨てる」など、『この表現はこのレベルでは話せなくてよい』というように、不必要な事項を削っていくことも重要」と述べている。

日本語教育におけるこのような動きを受けて、鈴木（2017a）は、中国語教育においても、中国語非母語話者が目標形式をできるだけ容易かつ早期に産出する手段としての文法知識を整理した「中国語教育文法」が必要であると主張し、「中国語教育文法」は「実践上は、どのような文法事項をどのような順序で導入するかという文法シラバスの設計にも関与するもので、文法事項の分割統合・取捨選択・導入順序の策定に対する直接的な判断材料となり、文法指導法や教材の編纂に影響を与える」ものであると述べている。この「中国語教育文法」は、中国語研究の成果としての文法（いわゆる「中国語学的文法」）を直接盛り込んだものではなく、「学習者が learner というよりは user としてコミュニケーション上の目的を達成するための手段を整理したもの」（鈴木 2017b、西 2017）であるべきである。そして、コミュニケーションの「場」を考えてレベル別に取捨選択された文法事項は、学習者が使用しやすいように、可能な限り、文レベルにおけるパターンである文型（または構文）として分割、分散して提示する、つまり、従来、体系的、網羅的に提示されてきた文法事項を「軽量化する」必要がある。

日本の大学における外国語教育に当てはめて考えてみると、大学第二外国語（以下、二外）カリキュラムは縮小の一途をたどっており（週 2 コマ→週 1 コマ、必修科目→選択科目、2 年間→1 年間など）、授業時間は大幅に減少している。第一（専攻）外国語カリキュラムには目立った授業時間の減少は見られないものの、この 20 年ほどの間に、（オーラル）コミュニケーション能力がますます重視されるようになり、専攻・非専攻にかかわらず、かつて文法説明に割いていた時間の一部または大部分が発音練習や本文の音読練習、コミュニケーション活動に取って代わっている¹⁾。このような状況下で従来の慣行により学習項目とされてきた文法事項を遺漏なく教えることはもはや不可能である。近年は、学習者側も、言語知識の体系的理解ではなく、手段、道具としての外国語の習得を求める傾向が強くなっており、限られた時間で、学習者のニーズに見合うよう、早急に教授（学習）項目とその導入順序を見直す必要がある。

段階に応じて文法事項を軽量化（取捨選択、分割統合、分散）すべきである、という考えは、中国語教育においても繰り返し主張されているが（楊德峰 2001、呂文华 2002、卢福波 2003、興水 2005、邓守信 2010 など）、特に日本の中国語教育においては、いまだこの主張を実現す

¹⁾ このことは科目名にも反映されており、実質的な授業内容がコミュニケーションなのかどうかはさておき、特に 21 世紀に入って以降、多くの大学で、「○○語コミュニケーション」のように「コミュニケーション」の名を冠する科目名が増加し、教材も対話形式の本文が主流となった。

るような文法指導要領やガイドライン、教材は出ていない。

文法事項の軽量化を実現する方法の一つとして、「構造の複雑な構文、例えば、“把”構文、“被”構文は初級では教えない」といった、一つの文法事項をそっくりそのまま「後回しにする」という考えもあるであろう²⁾。実際、そのように扱ったほうがよい文法事項もある。しかし、文法事項を分割、分散するなどして、初級者でも容易に使いこなせるような常用の文型のみを先に導入することで習得が容易になることもある。従来、一つの文法事項として扱われてきたものの中には、本来、使用される環境も習得難易度も異なる複数の用法が形式的特徴や意味的特徴の同一性、類似性だけでまとめられているケースも少なくないからである。また「コミュニケーション」という目的の下では、そもそも学習項目として立てる必要のないものもあり、そのような表現は思いきって削るという「勇気」も必要である。

本稿では、中国語学における比較表現を整理し、コミュニケーション（会話）重視、または総合的な中国語能力の習得を目的とした初級中国語教材における比較表現の扱いを確認し、各表現の習得難易度に関する考察を行ったうえで、主に初中級段階の文法事項の分割・分散化について試案を提示する。

なお、比較を表す表現については、中国語教材や文法書では「比較構文」「比較文」「介詞“比”を用いる比較文」「比較を表す“比”」「比較を表す文」などさまざまな呼び名が用いられている³⁾。「A 跟 B 一样」(A は B と同じだ)や「A 像 B ～」(A は B のように～だ)、「A 有 B (这么／那么) ～」(A は B と同じくらい～だ)、「最～」(最も～)など、同等や最上級を表す形式と合わせて「比較の言い方」「比較表現」と呼ぶものなど、文法事項の立て方や名称は教材、文法書により異なる。本稿ではひとまず、前置詞（介詞）“比”を用いた比較を表す表現とその否定に使用される表現を中心に狭義の「比較表現」と呼ぶことにする。

2. 「はじめに文法事項ありき」という視点による比較表現

2.1 中国語学における比較表現の記述

中国語教材の具体的な分析に入る前に、ここでもまず、中国語学における文法論研究の成果を反映させている文法書などにおいて、比較表現がどのように記述されているかについて確認しておく。

比較表現は文法書では多くの場合、「前置詞（介詞）“比”」の項目で取りあげられ、主に以

²⁾ ただし、現実には、どれだけスリム化が進んでも、最後のほうの課に“把”構文と“被”構文が半ば強引に提示されている教材が少なくない。

³⁾ 中国語でも“比字句”“差比句”“比较句”など、いくつかの用語が用いられている。

下の項目について説明が施される（刘月华ほか 1983、吕淑湘主编 1999、興水・島田 2009、丸尾 2010、相原ほか 2016 等）。

（イ）基本文型：A + 比 + B + 述語（形容詞（句）、心理動詞（句）など。ふつうはプラスの意味）

（A は B より～だ。）

（ロ）差量補語とその位置：程度や数量の差を表す表現は形容詞等の後ろに置かれる。

（ロ-1） A + 比 + B + 形容詞等 + 具体差量（例：“三岁”“一倍”など）

（ロ-2） A + 比 + B + 形容詞等 + 不定差量（例：“一点（儿）”“一些”“多了”“得多”など）

（ハ）使用できる程度副詞の種類：“还”“更”“再”などが使用でき、“很”“非常”“最”などは使えない。

ふつう、程度副詞と差量補語は共起しない。

（ニ）述語が様態補語の場合、“比 + B”は“V 得”の前後いずれにおいてもよい。

（ホ）否定：

（ホ-1） “没有”：A + 没有 + B + 形容詞など（A は B ほど～ではない。）

（ホ-2） “不比”：A + 不比 + B + 形容詞など（A は B より～というわけではない。

→ A と B は大差ない。⁴⁾

相手の思い込みに対する軽い反駁を表す。

（ホ-3） “不如”：A + 不如 + B + 形容詞など（A は B に及ばない。）

（ヘ）省略：A と B が同一構造（特に名詞句“N1 的 N2”）で同一の構成要素が含まれる場合、状況により B または A の一部（被修飾語、連体修飾語など）が省略できる。多義性を生じない限りにおいて、“的”の省略も可能である。

（ト）慣用（固定）表現：“一 + 量詞 + 比 + 一 + 量詞～”（～ごとに）

中国語学における文法論研究では、これらのうち、比較表現の述語の特徴、使用できる程度副詞の意味の違い、否定形（“没有”型否定における“这么 / 那么”の有無についてを含む）、比較項目の要素の省略可否、主題化構文における比較表現（例：“我力气比你大”“这事儿他比我着急”）などについて多く取りあげられてきた（朱德熙 1983、马真 1986、邵敬敏 1990、相原 1992、徐燕青 1996、1997、奥田 1992、小野 1998、崔维真・齐沪扬 2012、刘丹青 2012 等）。

2.2 中国語教材における比較表現の扱いとその問題点

文法書は文法事項を体系的、網羅的に記述するのが目的であるが、それをそのまま中国語教

⁴⁾ 刘月华ほか（1983）は“不比”型には“没有”型と同じ「A は B ほど～ない」という意味と、「A は B と同じだ」という意味の 2 つの意味があると述べているが、相原（1992）は主に語用論的な角度（「前提」）からそれに対し異議を唱えている。

育に持ち込んでも実用には適さない。コミュニケーションの目的や機能に応じた文法事項の軽量化（取捨選択・分割統合・分散）や加工が必要となる⁵⁾。では、比較表現は日本の大学中国語教育においてどのように扱われてきたのであろうか。比較表現は初級ではほぼ必須の学習項目と言えるが、これまでの教材では大きく以下のような傾向が見られた。

- (一) 構文（文型）としてではなく、「前置詞（介詞）“比”」のように、字単位あるいは語レベルで文法事項を示そうとする（いわゆる虚詞を語レベルで記述する）。
- (二) 初級で一度に全ての形を導入し（肯定形を出せば必ず否定形、基本文型“A 比 B ～”を出せば、形式の複雑な差量補語付きの表現も出すなど）、相互に関連する表現形式を網羅しておこうとする。
- (三) “A 比 B ～”の意味上の否定が“A 不比 B ～”ではなく“A 没有 B ～”となることや、差量補語の位置、比較表現に使用できる副詞の制限など、文法知識の整理を目的とした説明が多く見られる。特に“A 不比 B ～”や副詞“还”“更”の使用は、これらの形式の選択がより強い語用論的動機に起因しており、初級学習者はまず使いこなせないにもかかわらず、わざわざ初級段階で導入するものもある。

これらは2.1 で見たものと大差なく、中国語学的文法の視点をそのまま教育の場に持ち込んでいるにすぎない。

では、カリキュラムの縮小に伴ってさらにスリム化が進む主に二外向けの初級教材では、比較表現はどのように扱われているのだろうか。過去 10 年ほどの間に出版された中国語の（オーラル）コミュニケーション能力または総合的能力を重視した 15 教材において、比較表現がどのように提示されるかを調査した。個別の提示状況を表 1 に示す。

表 1⁶⁾

教材	(イ) 基本文型	(ロ-1) 具体差量	(ロ-2) 不定差量	(ハ) 副詞	(ニ) V 得	(ホ-1) 没有	(ホ-2) 不比	(ホ-3) 不如	(ヘ) 省略	(ト) 慣用
A	本 ポ 練	ポ 練	本 ポ 練	—	—	本 ポ 練	—	—	—	—
B	本 ポ 練	ポ 練	ポ 練	—	—	ポ 練	ポ	—	—	—
C	本 ポ 練 ド	ポ 練 ド	ポ 練 ド	—	—	ポ 練 ド	—	—	—	—
D	本 ポ 練	ポ	ポ	—	—	本 ポ 練	—	—	—	—
E	本 ポ 練	ポ	ポ	—	—	本 ポ 練	—	—	—	—
F	本 ポ 練	ポ	本 ポ	—	—	ポ	—	—	—	—

⁵⁾ ただし、文法知識の教授を主目的とした授業を除く。また、本稿は文法知識の教授を主目的とした授業を否定するものではない。

⁶⁾ 表中の「本」は本文、「ポ」は文法（表現）ポイント、「練」は練習問題、「ド」は各課の練習問題とは別に用意されたドリルに提示されていることを示す。教材 L 及び M のみ、参考までに続編の L2 及び M2 を挙げている。なお、両教材には文法事項の分割・分散化が一部に見られる。

G	本 ポ 練	ポ	ポ	—	—	ポ	—	—	—	—
H	本 ポ 練	—	—	—	—	ポ 練	—	—	—	—
I	本 ポ 練	ポ 練	(練)	—	—	ポ	—	—	—	—
J	本 ポ 練	—	ポ	—	—	本 ポ 練	—	—	—	—
K	本 ポ 練	ポ	—	—	—	ポ 練	—	—	—	—
L1	本 ポ 練	—	—	—	—	本 ポ 練	—	—	—	—
L2	本 ポ 練	ポ (練)	本 ポ 練	本 練	—	—	—	—	—	—
M1	本 ポ 練	ポ	—	—	—	本 ポ 練	—	—	ポ	—
M2	本 ポ 練	ポ 練	本 ポ 練	ポ 練	—	—	—	—	—	—
N	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

15 教材中 2 教材 (N、O) には比較表現の導入がなく⁷⁾、その他の 13 教材には主に以下の 3 点の特徴が見られた。

- (一) 基本文型及び“没有”型否定はほぼすべての教材において、本文とともに文法ポイントや練習でも取り上げられる。
- (二) 差量補語付きの比較表現は、多くの教材において本文には提示されず、文法ポイントでのみ提示される(説明はなく、例文が 1 文挙げられるのみの場合も少なくない)。
- (三) 比較表現に使用する程度副詞、述語の“V 得”(様態補語)の位置、“不比”型否定、“不如”型否定、一部の構成要素の省略、“一天比一天”などの慣用表現についてはほとんどの教材で提示がない⁸⁾。

文法ポイントの説明のしかたは教材によって異なり、また、教材は各教員によってアダプテーションが行われるため一概には言えないものの、表 1 を見る限り、以前よりも大幅に文法事項が削られているようではある。しかし、果たして、比較表現の否定形や差量補語付きの表現が基本文型と同時に提示される必要があるのだろうか。これらは限られた学習時間の中で、文法ポイントにごくわずかな例文が提示されるだけで習得できるものであろうか。そもそも、これらの表現は初級や中級レベルのコミュニケーションに本当に必要なものなのであろうか。自らの過去の教学に対する自戒の意味もこめて言えば、“没有”型否定は肯定形(“A 比 B ~”)との非対称性から、差量補語付きの表現はその語順の誤りやすさから、教師が「教えなければ」という責任感や使命感に突き動かされているだけではないか⁹⁾。導入の時期や順序を間違えれ

⁷⁾ スリム化の進む教材において、比較表現を導入しないという判断は、賢明とも言える。

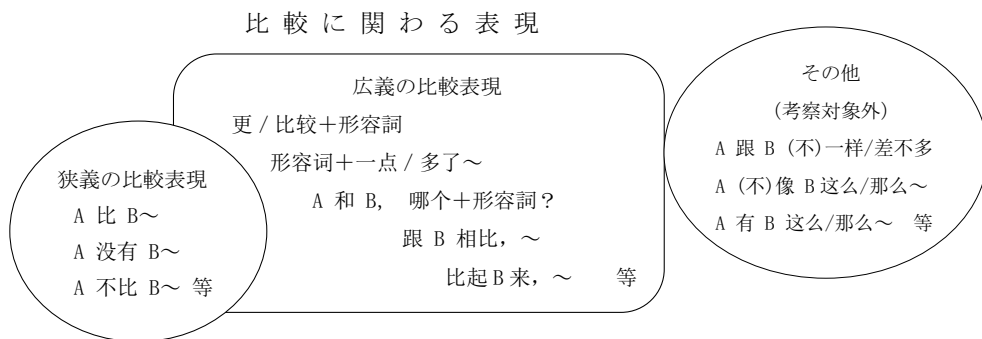
⁸⁾ “不如”型否定や“一天比一天”などの慣用表現はもともと初級で導入されることはほとんどなく、中級以降で導入されてきた。

⁹⁾ このような見解に対し、「文法事項として“没有”型否定や差量補語の位置を導入しておかないと、期末試験に出題する(のに都合のよい)材料がなくなる。」と言う教師もいるが、期末試験の実施目的を改めて考える必要がある。

ば、誤用を誘発するだけで、かえって習得を妨げることにもなりかねない。それぞれの文法事項の使用頻度や習得難易度を考慮したうえで導入の時期や順序を見極める必要がある。

3. 比較表現の分割・分散化と導入順序

前節までは前置詞（介詞）“比”を用いた比較を表す表現とその否定を中心に「比較表現」と呼んでいた。しかし、「コミュニケーション」という目的から出発すれば、これまで特に日本の中国語教育の中では「比較表現」として扱われてこなかった“比”を用いない“这个更好。”（このほうがもっといい。）、“现在好多了。”（今はずっとよくなりました。）、“iPhone 8 和 iPhone X, 哪个好?”（iPhone 8 と iPhone X、どっちのほうがいい?）のような文も比較を表す表現であり、むしろ、これらのほうが日常的に使用される比較表現ともいえる。本節以降、これらも含めた広義の「比較表現」を扱う（ただし、同等や最上級を表すものは本稿の考察の対象外である）。



3.1 先行研究

比較表現の文法事項の確定と導入の試案を提示するに当たって、まず、比較表現に関する第一言語習得、第二言語習得それぞれの先行研究についてまとめておく。

第一言語習得の研究では、李向农ほか（1991）が、2歳から5歳の幼児70名を対象に比較を表す表現の習得を調査し、“比”を用いた比較表現は2.5歳から習得がはじまるが¹⁰⁾、否定

¹⁰⁾ 李ほか（1991）は、2.5歳から3.5歳までの年齢層では、“比”を用いた比較表現の使用割合は、比較を表す表現（同一を表す“A跟B一样”などを含む）全体のわずか12%を占めるだけで、使用する用法の種類も少ないが、4歳から5歳までの年齢層では、比較の対象を表す表現（名詞句など）もより詳細になり、より複雑な構文の中で使用できるようになること、“比”を用いた比較表現の使用割合は比較を表す表現全体の34.5%を占めるようになることから、4歳から5歳までの年齢層で“比”を用いた比較表現の基本用法が習得されると述べている（ただし、“那个丫头片子，比谁都坏。”や“你比以前胖了。”など、任意の全てを表す疑問詞や、現在と過去の比較に用いる時間詞の使用はこの段階ではまだ見られない）。

形の習得は遅く、4.5歳でようやく“比不上”（かなわない）が現れ、“没有”型否定はさらに遅く、5.5歳でようやく使用が見られること、“不比”型否定に関しては使用が見られないこと等を示している。李ほか（1991）は幼児の否定形の習得が遅い、または否定の使用頻度が低い理由として、成人も否定の使用割合が低いこと、肯定と否定の形式が一对一对応しているわけではないこと、既に習得している別の形式、たとえば“我的筷子长，你的筷子短”（私のお箸は長いけど、君のお箸は短い）や“我跑得快，你跑得不快”（僕は走るのが早いけど、君は早くない）などを用いて表すことができること等を挙げている。

第二言語習得に関しては、学習者（中国語非母語話者）の誤用についての研究が中心で、“没有”型否定や使用する副詞、比較項目の要素の省略、語順（差量補語の位置を含む）の誤り、“A 跟 B 不一样／不同”と“A 跟 B 相比，～”の文型との混用（例：“*A 比 B 不一样”）など、文法的な誤りのほか、母語の干渉による誤用、形容詞の誤用（マイナスの意味を表す形容詞を用いるなど）についても言及されてきた（史有为 1994、袁毓林 2005、赵金铭 2006、張書涵 2008 など）。

第二言語学習者（中国語非母語話者）の各比較表現の習得難易度を調査したうえで、比較表現の文法事項の軽量化を図った試案を提示したものには陈珺・周小兵（2005）がある。陈・周（2005）は、まず《对外汉语教学语法大纲》¹¹⁾、《汉语水平等级标准与语法等级大纲》¹²⁾、《对外汉语教学初级阶段教学大纲》¹³⁾（语法大纲部分）、《高等学校外国留学生汉语教学大纲（长期进修）——语法项目表》¹⁴⁾、《高等学校外国留学生汉语言专业教学大纲》¹⁵⁾の五種類の学習（文法）指導要領を対象に、同等や最上級などを含む比較に関する表現の文法事項（文型）と提示状況を考察した。その結果、比較に関わる表現の文法事項（文型）は計 28 項目あり、陈・周（2005）はそれらを取捨選択して 20 項目に分割しなおし、さらにそのうちの 17 項目について、コーパスを使用して中国語母語話者と中国語（CSL）学習者の使用頻度や正答率を調査したり¹⁶⁾、初級から上級までの中国語（CSL）学習者に対して、並び替えや穴埋め問題などの調査を実施して、各文型の常用度や習得難易度を考察した。その結果をもとに、比較に関わる表現の文法事項をさらに取捨選択、統合し、導入順序を表 2 のように示している。

¹¹⁾ 王还主编（北京语言学院出版社、1995）。

¹²⁾ 国家对外汉语教学领导小组办公室汉语水平考试部编（高等教育出版社、1996）。

¹³⁾ 杨寄洲主编（北京语言文化大学出版社、1999）。

¹⁴⁾ 国家对外汉语教学领导小组办公室编（北京语言大学出版社、2002）。

¹⁵⁾ 国家对外汉语教学领导小组办公室编（北京语言大学出版社、2002）。

¹⁶⁾ 母語話者の調査は王朔の小説コーパス（約 10 万字）、学習者の調査は、中山大学の中上級の外国人留学生の作文コーパス（約 11 万字）を対象に行われている。

[表 2] ¹⁷⁾

学习阶段	语法项目	句式类型	句式
初级 (一)	1	简式差比句	1. 更 + 形容词
			2. 形容词 + {一点 / 一些 / 得多 / 多了 / 很多}
初级 (二)	2	一般比字句 (1)	3. A 比 B + 形容词
			4. A 比 B + 心理动词 / 能愿动词 + 宾语
	3	差比否定式 (1) (“没有”)	5. A 没有 B (这么 / 那么) ~
	4	度量比字句 (1) (精确度量)	6. A 比 B + 形容词 + 精确数量补语
			7a. A 比 B + 提高类动词 + 精确数量宾语
	5	一般比字句 (2)	8. A 比 B + 动词 + 程度补语
			9. A 比 B + 动宾 + 动 + 程度补语
中级 (一)	6	度量比字句 (2) (模糊度量)	10. A 比 B + 形容词 + 模糊数量补语
			7b. A 比 B + 提高类动词 + 模糊数量宾语
	7	度量比字句 (3) (复杂度量)	11. A 比 B + {多 / 少 / 早 / 晚} + 动词 + 数量补语
	8	差比否定式 (2) (“不如 / 比不上”)	12. A 不如 / 比不上 B ~
	9	预设比字句	13. A 比 B + {更 / 还 / 再} + 形容词 / 动词
中级 (二)	10	特殊比字句	14. 一 + 量词 + 比 + 一 + 量词
	11	预设比字句的否定式	15. 没有 比 B 更…的
	12	比字句的话语否定式 (“不比”)	16. A 不比 B ~
高级	13	书面差比句	17. A + 形容词 + 于 / 过 + B

陈珺 (2010) はまた外国人留学生 (韓国語母語話者) の作文コーパスと会話コーパスにおける比較表現の使用頻度及び誤用をもとに、各文法事項の常用度と習得難易度を測り、陈・周 (2005) に修正を加えている。まず“18. 比较 + 形容词”、“19. 跟 B 比起来 (相比) ~ / 比起 B 来, ~”の二文型を新たに追加し、特に“18. 比较 + 形容词”は各文型の中で、作文コーパスの結果では 2 番目に、会話コーパスの結果では 1 番目に正用の相対的頻度が高いことを示している。また、陈・周 (2005) では一つの文法事項として処理され、比較表現の中で最も早く導入される“1. 更 + 形容词”と“2. 形容词 + 一点 (得多 / 多了)”は、陈 (2010) の調査結果では、習得難易度、正用の相対的頻度が大きく異なることが示されている。

さらに、陈・周 (2005) においては、調査の結果、具体差量よりも不定差量の正答率が低く習得難易度が高いと判断されたため、具体差量補語つき比較表現は 4 番目、不定差量補語つ

¹⁷⁾ 表 2 は陈・周 (2005) の記述をもとに本稿で整理したものである。本稿の考察対象外である“A 跟 B 一样 / 差不多 ~”“A 不像 B 一样 / 这么 / 那么 ~”“A 有 B 这么 / 那么 ~”などを除いて記載している。また、番号や用語は原文と異なる箇所がある。

き比較表現が6番目に導入されているが¹⁸⁾、陈珺(2010)は、作文コーパス、会話コーパスいずれにおいても、具体差量より不定差量つき比較表現のほうが習得が早く、かついずれも習得が容易なことから、早い段階で同時に提示するのが望ましいとしている。

また、陈・周(2005)では、習得難易度がさほど高くないと判断され、“没有”型否定が3番目に導入されているが、前掲の李向农ほか(1991)や徐燕青(1997)、陈・周(2005)はいずれも“没有”型否定の使用頻度が実際のコミュニケーションにおいてかなり低いことを指摘している。たとえば、徐(1997)の調査した計約190万字余りの小説コーパスにおいて、“没有”型否定はわずか15例、計35万字の小説コーパスにおいては7例しかみられず、計29万字の小説コーパスでは1例も見られなかったという。陈・周(2005)の調査した王朔の小説コーパス(約10万字)においても“没有”型は1例もみられず(“不比”型も3例のみ、“不如/比不上”型も6例のみ)、中国語学習者の作文コーパスにおいても3種類の否定形はいずれも使用頻度が低かった。“没有”型をはじめとする否定の文型は、使用頻度が低いだけでなく、第一言語の習得過程においてもかなり遅く習得されるのと同様に、第二言語の習得過程においても難易度が高いと考えられる。陈・周(2005)、陈珺(2010)の調査では、比較表現の否定の誤り“*A比B不~”“*A没有比B~”などは“没有”型や“不比”型の誤用として分類されず、全て“A比B~”の文型に分類されているため、比較表現の否定形の習得の難しさは調査結果には表れにくくなっている。

3.2 本稿での追加調査

3.1で紹介した先行文献の調査はいずれも中国語母語話者または中国語環境下で中国語(CSL)を学ぶ学習者が対象であった。本稿は日本で中国語(CFL)を学ぶ学習者を対象とした比較表現の分割・分散化を目指すため、日本語母語話者を対象に追加の調査を行った。

日本の大学で専攻中国語を学ぶ中級学習者34名を対象に、ほぼ二週間おきに計4回、「AはBほど〜でない」の中訳問題を解かせ、終了するごとに10分程度の解説を加えて、比較表現の文型の正用率(単語や省略の誤りなどを除く)を確認したところ、以下のような結果となった(パーセントは小数点第二位を四捨五入した)。

¹⁸⁾ 陈・周(2005)も認めているように、調査項目(並び替え問題)に使用された不定差量を表す“很多”や“多了”等の単語の未学習または未習得が不定差量補語つきの比較表現の正答率を下げる大きな要因となったと推測される。

[表 3]

学習者の産出形式	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
A 没有 B ～	2 (5.9%)	14 (41.2%)	20 (58.8%)	30 (88.2%)
* A 没有比 B ～	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (8.8%)	0 (0.0%)
* A 比 B 不～	23 (67.6%)	7 (20.6%)	4 (11.8%)	1 (2.9%)
* A 比 B 没有～	2 (5.9%)	7 (20.6%)	1 (2.9%)	1 (2.9%)
* A 不 / 没有～比 B	3 (8.8%)	1 (2.9%)	1 (2.9%)	1 (2.9%)
その他	4 (11.8%)	5 (14.7%)	5 (14.7%)	1 (2.9%)

比較表現“A 比 B ～”(差量補語付きの表現を含む)及び“没有”型否定は、従来の慣行どおり、初級段階で既に導入済みのため、第 1 回は解説を加えずに実施した。第 1 回の正用率はわずか 5.9%で、“* A 比 B 不～”という誤りが最も多く (67.6%)、解説を経た第 2 回では、正用率が大幅に上昇するものの (41.2%)、比較表現の否定形として“没有”を意識させたためか、今度は“* A 比 B 没有～”という誤用が増え (5.9 → 20.6%)、“* A 比 B 不～” (20.6%) と肩を並べた。2 回目の解説を加えた後の第 3 回では、正用率がようやく半数を超えるものの (58.8%)、“* A 比 B 不～”は依然として産出されており (11.8%)、また第 2 回で増加した“* A 比 B 没有～”に代わって今度は“* A 没有 比 B ～”という形が新たに産出された (8.8%)。3 回目の解説の後に実施した第 4 回で正用率が 8 割を超えたが (88.2%)、わずかながら、英語の語順のように比較の対象 B が文末に来る“* A 不 / 没有～比 B”の形 (例: “今年的夏天没有热比去年。”) や“* 今年夏天没有热去年。”“* 今年的夏天比较不热去年。” (後の 2 文は「その他」に分類) などの誤りが最後までそれぞれ異なる学習者によって産出され続けた。「その他」には比較対象の A と B を入れ替えて“B 比 A ～”とし否定形の使用を回避する回答 (例: 「わたしは料理を作るのが姉はどううまくありません。」“我做菜做得没有我姐姐好。” → “我姐姐做菜做得比我好。”¹⁹⁾) も見られた。解説の仕方によって正用率が変わった可能性は否めないが、複数回にわたる構造と意味の解説にもかかわらず正用率が理想的な形で伸びなかったことから、少なくとも日本語を母語とする学習者にとって“没有”型をはじめとした比較表現の否定形は、その形式の難しさや実際のコミュニケーションでの使用頻度の低さから、習得が難しい文型の一つと言える。なお、4 回を通じて“A 不比 B ～”という回答は一例も見られなかった²⁰⁾。

¹⁹⁾ 中訳問題でなければ、正しいと判断される文である。

²⁰⁾ 日本の中国語教育では、“A 比 B ～”と意味的に対応する“没有”型否定に対して、形式的に対応する“不比”型は、語用論的意味が異なるため、「学習者が誤りを犯さないように」と“不比”型の意味をことさらに強調する傾向がみられるが、この結果からみても明らかのように、日本語を母語とする初中級の学習者が“没有”型否定を使用すべきところで“不比”型という「高度」な誤りをする恐れはほとんどない。むしろ、初中級で“不比”型を導入することで、比較表現の否定形の産出に無用な混乱を招く危険性のほうが高い。

前述の第4回の調査に引き続き、一週間後、さらに同じ中級学習者34名を対象に、不定数量補語付きの比較表現の中訳問題を解かせ、正用率を確認した。本文法事項も従来の慣行どおり、初級段階で既に導入済みのため、解説なしで実施したが、正しい語順である“A 比 B + 形容詞 + 一点(儿)”を用いたのは全体の32.4%に過ぎず、“* A 比 B + 有点(儿) + 形容詞”(35.3%)や“A 比 B + 一点(儿) + 形容詞”(5.9%)といった、差量を表す表現が形容詞の前に置かれる誤用が目立った。その他、“* A 比 B + 比较 + 形容詞”のように、副詞を用いて差量を表そうとしていた回答も一定の割合を占めた(14.7%)²¹⁾。この結果から、“形容詞 + 一点(儿)”の差量補語の位置は、初級の導入直後の練習問題や小テストであれば正答できるとしても、少し時間が経てば、あるいは、「差量補語の位置」の練習という枠組みから一歩離れれば、使用頻度も低いことから定着することなく忘れられ、容易に想起することができなくなるような、日本語母語話者にとって習得難易度の高い形式であることが推測される。陳・周(2005)は前置詞“比”を用いない“更 + 形容詞”と“形容詞 + 一点”の形式の比較文を、構造も意味も簡単で、かつ不定数量補語を伴う“A 比 B + 形容詞 + 一点”などの比較表現の基礎となることから、比較を表す文型の中で最初に教えるべきであると述べている。本稿もこの主張に同意する。ただし、前述のとおり、“更 + 形容詞”と“形容詞 + 一点”では習得難易度も異なり、また、陳珺(2010)の調査でも両文型の習得度に明らかに差異が見られたため、“更 + 形容詞”と“形容詞 + 一点(一些 / 得多 / 多了 / 很多)”は別の文法事項として扱い、“更 + 形容詞”から先に導入するのが望ましい。

3.3 比較表現の文法事項分割・分散化試案

学習時間や学習環境、調査の対象となった母語グループなどの違いから、陳・周(2005)、陳珺(2010)がCSL向けに示した試案をそのまま日本の大学の中国語(CFL)に当てはめるわけにはいかず、また、両者の比較自体、容易ではないが、日本の大学で一般に「初級」「中級」と呼ばれる中国語(CFL)のレベルは、高く見積もってもCSLの「初級(一)」から「初級(二)」の前半相当である。にもかかわらず、CSLで「初級(二)」や「中級(一)」などに設定される差量補語付き比較表現、“没有”型否定といった文法事項が、学習時間の圧倒的に少ないCFLの初級教材で多く提示されている。陳・周(2005)が「初級(一)」の文法事項としたのは、“比”を用いない“更 + 形容詞”と“形容詞 + 一点(一些 / 得多 / 多了 / 很多)”のみである。一つの文法事項の説明に裂く時間が限られる中、CFLの初中級であればなおのこと、これまでほとんどの教材で当然のように扱われてきた比較表現のいくつかを、学習項目

²¹⁾ その他、差量を表す部分が訳出されていない形容詞のみの回答、その他の回答がそれぞれ2例(5.9%)あった。

として「導入しない」という判断をしていく必要がある。

なお、分割・分散化にあたっては、同じ文法事項として扱われるものの中でも類似の表現が複数あるのであれば、より汎用性の高いもの、形式のシンプルなもの、発音のしやすいものをまずは採用するなど、学習者の負担を軽くする工夫も必要である。例えば、不定差量を表す“得多”（ずっと）と“多了”（ずっと）については、郭雲輝・田禾（2014）が、比較表現の述語が形容詞または“有+抽象名詞”の時には“得多”と“多了”いずれも使用できるが、この場合の“得多”には客観的に差が大きいことを表す傾向があるのに対し、“多了”は対話により多く用いて、話し手の主観的態度を表す傾向があることを指摘している。また、述語が動詞の場合には“得多”しか用いることができないこと、過去の状況からの変化を表す場合には（比較対象項目“比 B”が表れない場合も含め）、“多了”しか用いることができないことなども指摘している。そこで、初中級のコミュニケーションの場を想定し、より汎用性の高い形式と思われる“多了”をまず導入する。同様に、不定差量の“一点(儿)”（ちょっと）と“一些”（いくらか）であれば、話し言葉で多く用いられる“一点(儿)”を採用するなど、文型だけでなく、語彙レベルでも取捨選択を行うことが必要である。同様に、比較項目 A と B には動詞句なども生起しうるが、初級では名詞(句)、代名詞などに限り、段階を追って、他の形式も導入していくことが望ましい。

これらのことと現実的な初中級のコミュニケーション上の需要や形式のシンプルさなどを考慮して、比較表現の文法事項を分割、分散化し、導入順序を表4のように提案する。なお、“比不上”や“一天比一天”、“一次比一次”などは語彙レベルでの処理が可能なため、文法事項としては取りあげないことにする。一回の授業時間を90分、1学期を15回とすると、「初級Ⅰ」は週1回で2学期間進めた場合の学習時間（週2回の場合は1学期間）、「初級Ⅱ」は週1回で4学期間進めた場合の学習時間（週2回の場合は2学期間）、「中級Ⅰ」は週2回で3学期間進めた場合の学習時間、「中級Ⅱ」は週2回で4学期間進めた場合の学習時間を表す。

²²⁾ 同じく程度が大きいことを表す不定差量“很多”については、郭・田（2014）には言及がないが、この形式を導入することで、“* A 比 B + 很 + 形容詞”という誤用を誘発しかねないため、初中級では導入しないほうがよい。

4. おわりに

鈴木(2017a)は、日本語教育で指摘される課題——日本語研究の成果としての文法を日本語教育に応用するという意識が強く、本来、日本語教育に必要な部分も取り込んできたために、学習者の負担を増やしていることなど(野田編 2005)——の解決に中国語教育も早急に取り組む必要があることを指摘している。“A 比 B ~”を教えたら否定形“A 没有 B ~”も教えないといけなく考えるのは「はじめに文法事項ありき」の発想であり、この発想から出発すると、比較を表すためにまず前置詞(介詞)“比”の導入が必要になり、本稿で便宜的に「簡易比較表現」と呼んだ形容詞述語文(“比较/更+形容詞”、“形容詞+一点”など)や、選択式比較表現“A 和 B, 哪个~”などは初級段階の学習項目としてのほらなくなる。しかし“比”を用いずとも比較を表すことはできる。中国語教師からよく出される意見の一つに、“A 比 B + 形容詞+具体差量補語”という文型を導入しないと、「彼は私より2歳年上です。」のような年齢差などが表せなくなってしまう、それでは、学習者が困るのではないか、といったものがある。本当に学習者は困るだろうか。初級で学習する他の文型“我爸爸52岁, 妈妈50岁。”(父は52歳で、母は50歳です。)を用いて表すこともできるし、そもそも成人同士の会話であれば、比較でなくとも“50多了。”(50過ぎだ。)のように具体的な数量を避けて年齢を言うことも少なくない。初級や中級で具体的な数量差に言及しなければならないコミュニケーション場面は実際にはさほど多くないのではないだろうか²⁴⁾。

文法説明に投入し得る学習時間が大幅に減少する中、「コミュニケーションの場での使用」という目的から出発して文法事項を軽量化し、学習者の負担を減らしていかなければならない²⁵⁾。特に習得難易度の高い表現については、丁寧に細かく文法事項を説明、解説し、しっかり構造を理解させ(たつもりで)、練習問題に多くあたせたとこで、教科書からひとたび離れれば誤用が後を絶たない。それならば、野田(1995)の主張するように、「教えても習得されない可能性が高い文法項目は切り捨てる」「『この表現はこのレベルでは話せなくてよい』というように、不必要な事項を削っていく」軽量化をはかるほうがずっと効果的である。ただし、このような検討作業は個々の教師が行うには負担が大きすぎる。コミュニケーションのための体系的な「中国語教育文法」の確立が急務である。

²⁴⁾ 会話場面ではないが、陳・周(2005)が分析に用いた王朔の小説コーパスにおいても、差量補語付きの比較表現の使用頻度は低く、10万字の中でわずか2例みられたのみである。

²⁵⁾ 今回、教材分析の考察対象とした「スリム化教材」では、特に差量補語付き表現など、文法事項はそのままに、本文での例文提示や、説明、練習をしないという「スリム化」が見られたが、本稿で言う「軽量化」とは全くの別物である。

参考文献

- 相原茂・石田知子・戸沼市子（2016）『Why? にこたえるはじめての中国語の文法書（新訂版）』同学社。
- 井上優（2005）「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」野田尚史編、『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.83-102、くろしお出版。
- 郭雲輝・田禾（2014）「差比句“A 比 B……得多”与“A 比 B……多了”之比较」『コミュニケーレ』第3号、pp.61-71。
- 小林ミナ（2005）「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史編、『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.21-41、くろしお出版。
- 興水優・島田亜実（2009）『中国語 わかる文法』大修館書店。
- 興水優（2005）『中国語の教え方・学び方—中国語科教育法概説—』日本大学文理学部叢書。
- 丸尾誠（2010）『基礎から発展まで よくわかる中国語文法』アスク出版。
- 西香織（2017）「初級レベルに必要な比較表現とは—文法事項分割・分散による文型化試案—」中国語教育学会第15回全国大会予稿集、pp.71-75。
- 野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版。
- 野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編、『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.1-20、くろしお出版。
- 野田尚史編（2012）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版。
- 奥田寛（1992）「日・中両国語の比較文——おもにその比較成分のあらわれかたをめぐって」大河内康憲編、『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』pp.117-136、くろしお出版。
- 小野秀樹（1998）「中国語の比較文——“比字句”の意味と構造をめぐって」『中国語学』245号、pp.92-101。
- 白川博之（2005）「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚史編、『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.43-62、くろしお出版。
- 鈴木慶夏（2017a）「中国語教育文法設計の必要性—バックワード・デザインによる中国語学的文法からの解放—」杉村博文教授退休記念中国語学論文集刊行会編、『杉村博文教授退休記念中国語学論文集』pp.177-196、白帝社。
- 鈴木慶夏（2017b）「“把”構文に必要な教育文法とは—文法事項分割・分散による文型化試案—」中国語教育学会第15回全国大会予稿集、pp.76-80。
- 張書涵（2008）「「比」構文における誤用分析と教授法について」『ポリグロシア』第14号、pp.83-91。
- 相原茂（1992）〈汉语比较句の两种否定形式——“不比”型和“没有”型〉《语言教学与研究》第3期、pp.73-87。
- 陈珺（2010）〈比较句语法项目的习得难度考察〉《华南师范大学学报（社会科学版）》第3期、pp.46-52。
- 陈珺、周小兵（2005）〈比较句语法项目的选取和排序〉《语言教学与研究》第2期、pp.22-33。
- 崔维真、齐沪扬（2012）〈差比句肯定否定形式不对称现象考察〉《汉语学习》第6期、pp.11-19。

- 邓守信 (2010)《对外汉语教学语法 (简体字版)》北京语言大学出版社。
- 李向农、周国光、孔令达 (1991)〈儿童比较句和介词“比”习得状况的考察和分析〉《语文建设》第5期, pp. 16-22, 9。
- 刘丹青 (2012)〈汉语差比句和话题结构的同构性——显赫范畴的扩张力一例〉《语言研究》第4期, pp.1-12。
- 刘月华、潘文娒、故韡 (1983)《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社。
- 卢福波 (2003)〈对外汉语教学语法的层级划分与项目排序问题〉《汉语学习》第2期, pp.54-60。
- 吕淑湘主编 (1999)《现代汉语八百词 (增订本)》商务印书馆。
- 吕文华 (2002)〈对外汉语教材语法项目排序的原则及策略〉《世界汉语教学》第4期, pp.86-95。
- 马真 (1986)〈“比”字句比较项 Y 的替换规律试探〉《中国语文》第2期, pp.97-105。
- 邵敬敏 (1990)〈“比”字句的替换规律刍议〉《中国语文》第6期, pp.410-415。
- 史有为 (1994)〈说说“没有我水平低”〉《汉语学习》第4期, pp.17-19。
- 王灿龙 (2004)〈说“这么”和“那么”〉《汉语学习》第1期, pp.12-17。
- 徐燕青 (1996)〈“不比”型比较句的语义类型〉《语言教学与研究》第2期, pp.79-95。
- 徐燕青 (1997)〈“没有”型比较句的初步考察——兼及“不像”型比较句〉《世界汉语教学》第1期, pp.42-48, 67。
- 杨德峰 (2001)〈初级汉语教材语法点确定、编排中存在的问题——兼议语法点确定、编排的原则〉《世界汉语教学》第2期, pp.81-88。
- 袁毓林 (2005)〈试析中介语中跟“没有”相关的偏误〉《世界汉语教学》第2期, pp.56-70。
- 张邱林 (2014)〈偏标“比”字句〉《汉语学报》第4期, pp.2-13。
- 赵金铭 (1996)〈对外汉语语法教学的三个阶段及其教学主旨〉《世界汉语教学》第3期, pp.74-84。
- 赵金铭 (2006)〈从类型学视野看汉语差比句偏误〉《世界汉语教学》第4期, pp.67-74。
- 朱德熙 (1983)〈关于“比”字句〉《语法研究和探索 (一)》pp.7-8, 北京大学出版社。

分析に使用した教材リスト

- A 武信彰・山田真一 (2007)『中国語一年目の教科書——ユニバーサルデザイン』好文出版。
- B 西早稲田中国語部会 (2017)『シンプルチャイニーズ 東京 会話編』朝日出版社。
- C 洪潔清 (2009)『みんなで話す中国語』白帝社。
- D 大西博子・林君穂・中野徹 (2012)『开始吧 かあいしいば! 中国語』白帝社。
- E 小池一郎・名和又介ほか (2012)『新訂 開門! 中国語』朝日出版社。
- F 相原茂・陳淑梅・飯田敦子 (2017)『日中いぶこみ交差点』朝日出版社。
- G 三宅登之・張國璐ほか (2013)『花咲く中国語』朝日出版社。
- H 楊凱榮・張麗群 (2009)『身につく中国語 [改訂版]』白帝社。
- I 首都大学東京中国文学研究室編 (2008)『たのしいの中国語』金星堂。
- J 胡金定・吐山明月 (2016)『すぐ話せる中国語 (改訂版)』朝日出版社。

- K 楊凱榮・張麗群（2008）『新・中国語への船出』朝日出版社。
- L1 岡田英樹・絹川浩敏ほか（2010）『新・コミュニケーション中国語 Level 1』郁文堂。
- L2 絹川浩敏・胡玉華・張恒悦（2010）『新・コミュニケーション中国語 Level 2』郁文堂。
- M1 古川裕監修、鈴木慶夏著（2016）『“アクション！”“开始！”—コミュニケーション中国語—』朝日出版社。
- M2 古川裕監修、鈴木慶夏著（2017）『“アクション！”“开始！”2—コミュニケーション中国語—』朝日出版社。
- N 高橋良行・村上公一・陸明（2009）『初めての中国語コミュニケーション（改訂版）』同学社。
- O 楊光俊・李貞愛ほか（2014）『新・すぐに使える中国語——忘れられない日々 [レベル1]』郁文堂。